

日付:2016年2月14日／聖書:ヨハネによる福音書12:20～26

説教:「一粒の麦」

イエスはご自分を「一粒の麦」に譬える。《自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る》(25節)。この言葉は自己犠牲を勧めるものではない。人間の肉体としての命を捨てるのが永遠の命を得る条件であるかのように誤解されやすいが、ここでの「一粒の麦」は、あくまでイエス・キリスト御自身のことである。かつて日本は、多くの若者を国家のため、天皇のためにと、命が捧げられた。いや、命が虫けらのように捨てられてきた。「自己犠牲」を美化する思想を植え付けたのである。「自分の命を愛することが許されず、この世で自分の命を憎むかのように投げ出す人は、それを保って国家、天皇のための、永遠の命に至る(靖国神社に祀られる)。」そういう教育があった。

25節に「命」という言葉が3回出て来る。原語(ギリシア語)では、「いのち」は2つの言葉があり、最初の2つ「自分の命を愛する者は」と「この世で自分の命を憎む人は」の命は、プシュケーという言葉で自然的な命、肉体の命を表す。3つ目の「永遠の命に至る」の命は、ゾーエーという言葉で霊的な命を表す。ゆえにイエスは、「自分自身の命を愛することをせず」に、「この世で自分の命を憎む」ことをして「永遠の霊的な命に至る」ということ。イエスの十字架には、そのようにしてでしか向かうことが出来なかったということを表している。

26節で《わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」》ここは、25節の「命」についての言及はない。「私に従う者」すなわち、キリストに従う者は、主なる神が「その人を大切にしてください」と言う。神は、私たちに「命を捨てよ」とは言わない。むしろ、《神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるため》(ヨハネー4:9)と言う。神は私たちに「生きよ」と言っているのである。

「一粒の麦」は吹けば飛び、足で踏みつけられる存在である。この世の権力者は、「自己犠牲」を美化し、人を吹けば飛ぶような「一粒の麦」のように踏みつける存在として人間の歴史を築いてきた。今また日本の政治は、戦争が出来る国づくりに励んでいる。若者の命を“国家のために”と言わんばかりに。そのことがどんなに罪深いことか。キリストの受難の出来事を通して、神の愛の深さ、人の命の尊さを覚え、「一粒の麦」の意味を改めたい。(神谷)